

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (教育学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	道法 愛
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 日本語における否定のアスペクト形式の研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	仁科 陽江	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	永田 良太	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	小口 悠紀子	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	白田 理人	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、日本語における否定のアスペクト形式としてシテイナイとシナイを対象とし、それらが共に未完了を表すというアスペクト範疇の観点から、それぞれがどのような意味特徴を持ち、使い分けられるのかを検討し、肯否の非対称性について考察したものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、これまでの日本語のアスペクト研究を振り返り、問題の所在を提示した。これまでの研究の多くが肯定形式について扱ったものであり、以下のような否定形式の問題が解決されていないことが指摘された。「もう五月なのにチューリップがまだ (咲かない/咲いていない)。」という発話は、自分の家の花壇の世話をしながら不満げに言う場合には前者が自然で後者が不自然、旅行でオランダのチューリップを見に来て言う場合は前者が不自然で後者が自然である。</p> <p>第2章では、先行研究が紹介され、アスペクト研究における本研究の位置づけが行われた。先行研究を踏まえて第3章以下で解決すべき課題を提示している。</p> <p>第3章では、シテイナイの未完了とシナイの「未完了」の意味記述を検討し、シナイが「未完了」を表す条件については、当該事態が実現済みになっているという想定のもとで話し手が述べていることと規定し、その想定には、「願望タイプ」と「推論タイプ」という異なるタイプがあることを明らかにした。本研究では、否定は肯定を前提とするという否定文の特性を踏まえ、「前提」という観点から、両形式の意味記述を以下のように結論づけた。シテイナイの未完了では、発話時に事態がすでに実現済みという結果があるという前提に対し、発話時にそのような結果が見られないことを述べ、一方、シナイの「未完了」では、事態が未実現から実現済みになっているという話し手の想定に反して、把握する中で話し手の想定が外れ続けていることを述べる。</p> <p>第4章では、第3章で検討した意味特徴について、その使用文脈を探った。「想定」とその伝達効果という形でスキーマ化し、また、話者による事態の「把握」についても意味特徴の因子として、未完了表現の使い分けを体系づけた。</p> <p>また、日本語教育の観点から、学習者の理解・運用のために留意すべき有用な記述も行っている。</p>			

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

第5章では、否定のAspect形式の特徴を、肯定形式との比較から考察した。そこでは、限界達成/未達成というAspect的対立を話し手の事態への捉え方に対応するとし、限界（未）達成の決め手となるのは、実現済みになることへの望ましさであるとした。

第6章では、第5章に続いて、形式の非対称性という観点から、完了形式との比較を行った。日本語の助動詞タの表すカテゴリーを概観し、シタのもつ完了の意味が、語用論的な意味であるとした。

第7章は終章として、第6章まで論証した内容を基に本研究の意義がまとめられ、今後の展望が述べられた。

本論文は、次の点で高く評価できる。

1. 先行研究で行われた記述の論理を緻密に精査し、多くの用例を検証し、否定のAspectから派生する様々な意味解釈の発展性を示したことは特筆に値する。
2. 結果相にみられるような結果状態に先行する出来事の限界達成を、本研究では、発話時の話者の認識の構造として捉え、それに付随する心理的に複雑なニュアンスの違いを異なる否定形式の枠組みにおける相違として記述したことは、欧米の近代言語学におけるAspect研究には見られないオリジナリティがある。
3. このような否定表現についての的確な文法記述はいまだ定着しておらず、その本質的意味の探求や使い分けの記述に果敢に挑み、学習者のための文法記述への応用の可能性を示したことは高く評価される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 6年 7月 4日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)